様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　5 月　15 日現在

機関番号：３２６８３
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2010～2011
課題番号：22720132
研究課題名（和文）　現代フランス語圏の文化：文学と舞台芸術を中心にして

研究課題名（英文）　Literature and performing arts in Francophone culture

研究代表者
小野　正嗣　（ONO MASATSUGU）
明治学院大学・文学部・専任講師
研究者番号：20431778

研究成果の概要（和文）：コンゴ出身の振付家フォスタン・リニエキュラの舞台作品『ベレニスと訣別するために』と『Cargo』を分析し、植民地支配、とりわけ言語支配が、被植民者の人々の現在のアイデンティティ形成に深い影響を及ぼしていることを明らかにした。また、レバノン出身のフランス語圏作家アミン・マアルーフの著作の詳細な読解から、この作家の文明論的考察が、今日の世界、とりわけ西洋とアラブ世界の対立を理解する上できわめて有効であることを明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Analyzing two works of a Congolese choreographer Faustin Linyekula, we show the past colonial - particularly linguistic - domination of the West on colonized people is decisive for their identity formation. Our reading of *Le délègrement du monde* of a Lebanese writer Amin Maalouf shows that his reflection on the globalization is helpful when we try to understand actual conflicts between the West and the Arab-Islamic World.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：ポストコロニアル、フランス語圏文化、フランス語圏文学、舞台芸術、比較文学

１．研究開始当初の背景

植民地と本国文化との関係に着目する文化・文学研究といえば、英米のポストコロニアル研究がある。ポストコロニアル研究は、フランス現代思想の理論的言説に大きく準拠して発展した。ところが、そうした思想の「輸出国」フランスにおいては、人種や文化などの個別的差異を超えた「自由、平等、博

愛」に代表される普遍的価値への同一化を、国民「統合」理念としてきたため、文化的多様性を尊重する多文化主義を背景にして生まれた英米のポストコロニアル的な問題意識が発達することはなかった。

しかし近年、フランス近現代史において、「共和制」の「例外状態」、共和国精神からの「不幸な逸脱」として論じられることの多かった植民地的過去を、むしろ共和国的体験の中核をなすものとして捉え直そうとする新しい歴史学的試みがなされている（P. Bancel, P. Blanchard, F. Vergès, *La République coloniale*, 2003.）。「フランスのアイデンティティ形成に〈植民地的なもの＝コロニアルなもの〉の体験が決定的な役割を果たしている」という問題意識のもと、フランス人の想像世界、その他者との関係、すなわちフランスという国の現在のありようが、細部に至るまでコロニアルな体験に貫かれていることが明らかにされたのである。第三共和制以降から現代に至るフランスの大衆文化（映画、音楽、雑誌・新聞）や経済や政治やさまざまな知の領域においてコロニアルなものがどのように主題化されているか、それがどのようにして本国文化にコロニアルなものを浸透させ、フランス人を無意識のうちに植民地主義者にしていたかについての興味深い研究もなされている（P. Blanchard, S. Lemaire, *Culture impériale, La France conquise par son Empire, 1871-1931*, 2003, *Culture impériale, Les colonies au cœur de la République, 1931-1961*, 2004, *Culture post-coloniale, 1961-2006*, 2006.）。

また、移民に関しては、80 年代以降研究が進み、「国籍」や「市民権」の概念の歴史研究では、パトリック・ヴェイユ（P. Weil, *La France et ses étrangers*, および *Qu'est-ce qu'un Français ?*）、また、外国人差別を含む移民史においては、ジェラール・ノワリエル（*Le Creuset français* など）が、参照すべき優れた仕事を達成している。

ところが、このような問題意識を可能にした、フランス内部のコロニアルな「他者」についての研究は、主として、社会学、歴史学の分野に集中し、文学および舞台芸術研究の領域において、具体的な作品分析というかたちではあまり行なわれてこなかった。しかも、植民地的出自を持つ「文化的他者」のアイデンティティ形成の問題はもっぱら、そうした「他者」を研究の「対象」とすることでなされてきた。つまり、「他者」は、あくまでも「客体」であり、その主体的・能動的な側面は見過ごされがちであった。

２．研究の目的

では、「他者」は、自らのコロニアルあるいはポストコロニアル的な体験を、そしてそうした「過去」が可能にした自らの「現在」を、どのように捉えているのか？

それが具体的な「かたち」として表現されるのが、まさしく文学や演劇などの芸術領域なのである。

本研究のねらいは、そうした芸術的表現形式を通して、かつての植民地に出自を持つ者たちのアイデンティティ形成の問題にアプローチするところにある。

フランスにおいては、現在、フランスに出自を持ついわゆる「フランス人」とは異なる文化的背景を持つ芸術家の活躍がめざましい。彼らの作品には、単に「芸術的・美学的」とだけ形容するのは困難な、政治的・歴史的な要素が組み込まれている。あるいは、そのような政治的・歴史的次元との関係において創造活動を行なっていると言ってもよい。

旧植民地出自の芸術家たちの実存が、植民地的過去との関係なしにはあり得ないのだから、かりに植民地の問題をストレートに扱っていなくとも、その創造の営為自体が、コロニアルなものを内包せざるをえない。つまり、作品のひとつひとつが、コロニアルなものに対する芸術家の能動的・主体的な応答となっているわけである。このような問題意識のもとに、本研究代表者がこれまで培ってきたカリブ海のフランス語圏作家研究の成果を、旧植民地を出自とする作家・芸術家たちの作品の読解に応用することによって、本研究では、コロニアルなものが、旧植民地の出自を持つ人々のアイデンティティに、そして彼らの作品を観る「フランス人」のアイデンティティに及ぼした作用・効果を明らかにする。

生まれ育った故郷を離れ、母語ではないフランス語を表現手段として用い、ある種の「亡命状況」を生きるそうした芸術的表現者たちは、フランスおよび西洋から自分たちに向けられるまなざしに対してどのようなかたちで応答しているのか。他方、彼ら・彼女ら自身がフランスに向けるまなざしにして

も、彼ら・彼女らがフランス語で書き、フランスにおいて作品を発表しているという事実が端的に示すように、すでにフランス的なものを内包した――「フランス／植民地」といった二項対立には還元できない――複雑なものである。

くり返しになるが、彼ら・彼女の主体的かつ能動的な応答、すなわち「作品」を、美学的・文学的な問題にのみに還元することなく、そこに含まれているはずの政治的、倫理的な問題をも明らかにしようとするところに本研究のねらいのひとつがあることは強調されなければならない。

そして本研究においては、当然ながら、フランスの旧植民地であった地域に出自をもつ芸術的表現者たちの能動的・主体的側面に着目されることになる。つまり、彼ら・彼女らが自らのコロニアルあるいはポストコロニアル的な体験から出発して、どのような芸術的・思想的表現を練り上げているのかを理解することが試みられるわけである。

小説、評論、詩、演劇、ダンスと表現のかたちは異なれど、そうした表現者たちの作品のなかには必ず、植民地的経験そのものについての深い考察が見受けられる。彼らの生きる「現在」（多くの場合、彼らは「移民」あるいは「亡命者」でもある）のさまざまな問題を、植民地的な「過去」との関係のなかで問うとき、芸術的なアプローチによってのみ可能となるものがあるはずである。そのような可能性を、グローバル化する現代世界の文学や文化の特徴と合わせ、従来の個々の国民文学・文化という枠組みを越えた「世界文学」という大きな文脈のなかで明らかにすることが本研究においては目指されるのである。

３．研究の方法

現在活躍している作家および舞台芸術家を対象とする研究であるので、方法としては、まず何よりも彼ら・彼女らの作品を精緻に読み込む・鑑賞するほかない。

だが、対象としている芸術家が同時代を生きていることの利点を最大限に活用しない手はない。つまりインタビュー調査である。

作品はいかに着想され、練り上げられ、どのような手法にもとづき、どのような条件下で実現されたのか。どのような読者・観客を想定していているのか。そうしたことについて、創作者たち自身から直接話を聞くことを試みる。創作者らが作品について、そしてまた自らの表現者としての軌跡について語る言葉と、実際の作品についての分析結果を付き合わせることによって、彼ら・彼女らが自らを取り巻く〈コロニアルなもの〉を、どのように受容・理解し、それをどのように「作品化」しているか、その創造のプロセスを明らかにする。

さらにまた、創作者らが作品の産出および受容状況をどのようにとらえているのか、つまり自分の作品がもっぱらフランス語で表現され、フランスを中心とする西洋で受容されているということを、どのようにとらえているのかについて尋ねる――作品のなかには直接表明されることの少ない、そうした作者の西洋に対する意識について問い尋ねることは重要である。個々の作品の単独性のみならず、作品を産出し流通させることを可能にする文化的、歴史的、政治的コンテクストを明らかにすることによって、フランス文化の多様性・多元性を、そして同時に、複数の文化の交流が持つ創造的な可能性をより明確に理解することができるからである。

４．研究成果

上記の目的のもと、本研究では主に、コンゴ民主共和国出身の振付家・演出家で、昨今フランスをはじめとするヨーロッパで活躍のめざましいフォスタン・リニエキュラ（Faustin Linyekula）と、レバノン出身で、アカデミーフランセーズ会員でもあるフランス語表現作家アミン・マアルーフ（Amin Maalouf）の仕事を分析することになった。

1974 年生まれのフォスタン・リニエキュラは、90 年代のコンゴ民主共和国の動乱の経験をもとに、そうした動乱に至るベルギー植民地時代からのコンゴ現代史を視野に入れた、政治的な含意の強い、きわめて意欲的な演劇・ダンス作品を創出してきた。また、リニエキュラは、コメディー・フランセーズとともに、ラシーヌの『ベレニス』を、フランス現代社会における「移民」の物語と読みかえ、これを外国人役者によって演じさせるという斬新な演出も行なっている（2009 年）。

リニエキュラの数ある作品のうち、『ベレ

ニスと訣別するために』、『Cargo』を対象にして、リニエキュラ本人に複数回インタビューを行ないながら、分析を進めることとなった。『ベレニスと訣別するために』においては、植民地支配、とくにフランス語による言語支配が、独立後の現在に至るまでコンゴの人々のアイデンティティ形成に及ぼしている影響が主題となっており、ソロダンス作品『Cargo』においては、植民地支配によるコンゴの伝統的・精神的風土の暴力的な破壊が主題となっていた。インタビューで彼の経歴や、作品の背景にある思想について詳しく話を聞くことによって、立体的な作品理解が可能になった。

Le rocher de Tanois (1993)でゴンクール賞を受賞するなど、いまや国際的な作家であるアミン・マアルーフの小説作品の多くにおいては、東洋と西洋との交流の歴史が主題となっている。昨今では、フィンランドの音楽家カイヤ・サーリアホのオペラの台本（*L'amour de loin*, 2001. *Adriana Mater*, 2006）を執筆するなど、マアルーフは舞台芸術に関わる仕事も行なってきた。この作家に関しては、彼の文明論、とりわけ現代における西洋社会とイスラム世界との対立を、非西洋社会の近代化の挫折と宗教的帰属意識の回帰の問題から論じた『世界の混乱　Le dérèglement du monde』の詳細な読解を進めた。2009 年に書かれたものであるとはいえ、この書で展開されたマアルーフの考察は今日の世界、とりわけ 2011 年の「アラブの春」以降のアラブ・イスラム世界の諸問題を理解する上で、きわめて有効であることが判明した。

最後に、グローバル化した世界において文学を学ぶことにはどのような意義があるのか、文学は社会にとって有用なのかといった問題について、本研究代表者が執筆した『ヒューマニティーズ　文学』には、本研究から得られた知見の一部が大いに活用されていることを言い添えておく。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計１件）

① <u>小野正嗣</u>、ヒューマニティーズ文学、岩波書店、2012、193

６．研究組織

(1)研究代表者
小野　正嗣（ONO MASATSUGU）
明治学院大学・文学部・専任講師
研究者番号：２０４３１７７８

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし